

いたにもかかわらず、直接的資料の欠乏が研究を妨げ、多武峰と猿楽の関係を正面から追及した先人の論考は僅少であった。それがかかる長大な考察を必要とした所以である。長大ではあるが、資料の大半は間接的なものであり、どの問題も隔靴搔痒の感を禁じ得ない不徹底に終始した。論じ残した事やら誤謬も少なくないと思われるが、それらは大方の御叱正・御助言を仰いで補正を期したい。

(本稿は、『鏡仙』に連載した「百々裏話」の51回から58回にかけて(昭和42年11月～43年7月)、「多武峰の能」と題して執筆した小論を母胎とし、その後調査し得た事どもを加えて増補・修正したものである。能楽懇談会第22回例会(昭和43年11月)に「大和猿楽と多武峰」と題して発表したり、宝生流囑託会昭和45年夏季講座に「宝生流の歴史」の題で話した事(『宝生流囑託会会報』52号「昭和47年1月」)所載の「宝生流の歴史―その発生期を中心に―」がその要旨)は、その中間発表的なものである。その間、資料調査の面でも多くの方々のお世話になり、恩師能勢朝次博士を初めとする先学各位の学恩に浴することが多かった。法政大学研究助成金(昭和44年度)や文部省科学研究費(昭和47・48年度)の恩恵を得たことと共に、深く御礼申し上げる。へ49・2・25)

能楽研究所蔵

「狂言 水野文庫」目録

古川 久

まえがき

本文庫は故水野善次郎氏の御遺志に基づき、昭和四十七年夏に同家より法政大学能楽研究所へ寄贈されたものである。私が始めて水野家所蔵の鷺流文書の所在を知ったのは、昭和二十八年に日本古典全書『狂言集』を編むこととなった時である。同書には鷺流本を採用する方針としたので、故野々村戒三氏はかねて水野家で手写された鷺畔翁及び矢田蕙斎自筆本の教曲を、収録するようにと勧められた。私は一度原本の姿に接したいと願いながら、ついそのままに過ぎた。

やがて東京女子大学で教えた最後の学生の中に宮崎紋子さんがいて、郷里山口の鷺流狂言に関する卒業論文を書く相談を受けた。私は風土性による伝承の変化に注目するよう勧め、できるだけ手広く本文を読むのを願った。宮崎さんが子期以上の成果を上げ、昭和四十五年春卒業すると、帰郷に先立ち世話になった水野家へも挨拶に出たいということで、誘われるまま私も同行することにした。

生憎主人水野善次郎氏は御不在であったが、夫人は快く蔵書を見せて下され、実は保管に悩む由を告げられた。私としては子期せぬことであったが、能楽研究所の性格を述べて受入れの用意も可能であると述べ、改めて御主人の御意向を伺

い上がる約束で辞去した。直後に宮崎さんの好意で山口を訪れ、中西治郎家の文書を拝見し、石川弥一氏に初対面して「中央における鷺流狂言の滅亡」、『山口女子短期大学研究報告』第十号、昭和33年3月)の御労作を頂き、水野家蔵書についての知識を深めることができた。

昭和四十七年に入って程なく、善次郎氏の急逝が夫人から伝えられ、同時に故人の希望として所蔵本の研究所寄贈を申し出された。このような経過で貴重な文献を受容できた研究所としては、学術的意義を重視して寄贈に踏み切られた水野家の御遺族に敬意を表するとともに、仲介者の宮崎さんにも感謝しなければならぬ。幸い、『観世』昭和46年11月号に「観世付鷺流狂言の興亡」と題し、卒業論文の前半を補正して掲載した宮崎さんの論考があるので、中から水野文庫に関わる項を引き、その敬意を表わすこととした。

鷺畔翁の後継者は、水野清太郎(一八八五—一九二〇)である。矢田蕙斎・鷺畔翁・服部彦七らが、歌舞伎役者や青物問屋の人々を教えていたが、水野清太郎も神田の青物問屋だから、その関係で弟子になったのであろう。清太郎は水野素舟または矢田次郎と名乗っており、畔翁主催の「互得会」に名が見える。畔翁が大正十一年に、八十一歳で亡くなっているが、それに先立ち、清太郎は、大正九年に三十五歳の若さで亡くなっている。畔翁は鷺流の伝書と名跡を、清太郎の弟脩三氏(昭和三十四年没)に委託し、現在は清太郎の実子善次郎氏(東京都千代田区神田多町二〇八)の保管になっている。水野脩三氏は観世流の能には通じていたが、狂言は習得しなかった。脩三氏が清太郎の弟ということで、すべてを委託された訳であるが、これはいかに清太郎に対する期待が大きかったかを示すものである。もって水野文庫の由来と価値とを、知ることができよう。鷺流関係の資料としては本文庫が最大のものと言い得る。

目録を掲げるに当り、改めて水野善次郎氏の御冥福を祈り、御遺族の御好意を謝しつつ、文献の保存と活用に努めたいと願う。

「水野文庫」目録

1 「鷺流狂言型附本」

横本十一冊

最終冊の奥書に「大正元年十一月吉辰認之水野氏事矢田次郎(譲ル 家元鷺家廿世仁右衛門七十一翁畔翁(印)」とある。各冊の題簽と内容は左の通りである。

〔形附脇狂言 第老〕

末広がり・張蛸・目近込骨・三本柱・麻生・福の神・大黒退歌・恵比須大黒・恵比須毘沙門・連歌毘沙門・氏結・相合烏帽子・昆布柿・雁厂金・松櫟・勝栗・三人夫・餅酒・佐渡狐・筑紫奥。

〔形附大名事 第貳〕

煎物・鍋八掻・牛馬・宝の髓・隠れ笠・鏝・文蔵・二千石・鬼瓦・早漆・栗田口・鞆猿・入間川・秀句傘・今参・文角力・鼻取角力・蚊角力・萩大名・二人大名。

〔形附出家事 第参〕

蛸・栄螺・金津地藏・地藏舞・骨皮・不腹立・薩摩守・名取川・遊善・小傘・呂蓮・悪坊・悪太郎・宗論・無布施経・水汲新発意・花折新発意・通円・楽阿弥・泣尼。

〔形附舞事 盗人事 第四〕

鶏舞・懐中舞・引歌舞・音曲舞・庖丁舞・賽目舞・斯好舞・水掛舞・船渡し舞・泣舞・岡大夫・八幡前・二人袴・盆山盗人・花盗人・子盗人・雁盗人・瓜盗人・連歌盗人・引纏り。

〔形附鬼事 座頭事 第五〕

朝比奈・餅差十王・八尾・半銭・鬼の髓・節分・宝箱取・鬼の継子・首引・神鳴・闇罪人・伯母ケ酒・清水・伯養・井籠・不聞座頭・川上座頭・花見座頭・茶観座頭・月見座頭。

〔形附女事 第六〕

墨塗・契木・箕被・吃り・鎌腹・法師ケ母・若菜・因幡堂・内沙汰・鈍太郎・石神・髭櫓・釣針・若市・塗師・河原太郎・鏡男・業平餅・金岡・庵の梅。

〔形附山伏事 雑ノ部 第七〕

蟹山伏・柿山伏・栴宜山伏・犬山伏・苞山伏・梟山伏・腰折・人か杭か・鐘の音・花争・伊文字・止動方角・素袍落・空腕・唐人子室・仁王・米市・合柿・歌仙・八句連歌。

〔形附雑ノ部 第八〕

栗焼・居杭・心奪・太刀奪・抜殻・磁石・柑子・大般若・仏師・三人支離・棒縛・文荷・鶏流・鳴子・狐塚・伊呂波・痺・鞆・長光・茶壺。

〔形附雑ノ部 第九〕

土筆・飛越・舎弟・船ふな・口真似・咲花・雁標・附子・昆布売・鞍馬参・千鳥・酢辛・文山達・縄なひ・寐音曲・物真似・富士松・呼声・惣八・膏薬煉。

〔形附習事 第拾〕

西翁・菊水祖父・武悪・鱸庖丁・木六駄・鬼争・枕物狂・比丘定・篤・老武者・唐角力・兒鏡流馬・成頼・人馬・お冷し・横座・禁野・寐代り・鹿ぞ啼・胸突。

〔囃子附 全〕

- 子。8 通門。9 素袍落。10 恵比須毘沙門。
- 〔二〕 1 三本柱。2 清水。3 祐善。4 鎌腹。5 連歌毘沙門。6 目近米骨。7 鞍馬參。8 金岡。9 茶壺。10 蛭子大黒。
- 〔三〕 1 張蝮。2 船ふな。3 比丘定。4 惣八。5 大黒連歌。6 餅酒。7 口真似。8 枕物狂。9 磁石。10 氏結。
- 〔四〕 1 雁厂金。2 昆布売。3 泣尼。5 煎物。6 三人夫。7 伊呂波。8 餌差十王。9 千鳥。10 花折新発意。
- 〔五〕 1 勝栗。2 花争。3 八尾。4 悪坊。5 契木。6 筑紫奥。7 富士松。8 朝比奈。9 子盗人。10 合柿。
- 〔六〕 1 昆布柿。2 節分。3 空腕。4 腹立ず。6 鎧。7 文山立。8 水汲新発意。9 祢宜山伏。10 首引。
- 〔七〕 1 宝の槌。2 長光。3 法師が母。4 二千石。5 米市。6 隠笠。7 麴。8 宗論。10 髯樽。
- 〔八〕 1 相合烏帽子。2 鶏流。3 宝の窟取。4 井礮。5 連歌盗人。6 松樫。7 呂連。8 二人大名。9 若菜。10 止動方角。
- 〔九〕 1 斯好舞。2 文蔵。3 塗師。4 花見座頭。5 木六駄。6 船渡聲。7 栗焼。8 布施無経。9 蟹山伏。10 文荷。
- 〔十〕 1 八幡の前。2 しびり。3 鳴子。4 箕被。5 業平餅。6 二人袴。7 雁磔。8 吃。9 鬼の槌。10 金津地蔵。
- 〔十一〕 1 引歌聲。2 土筆。3 菊水祖父。4 鈍太郎。5 三人片輪。6 岡太夫。7 八句連歌。8 章魚。9 牛馬。10 釣針。
- 〔十二〕 1 音曲舞。2 物真似。3 花盗人。4 伯養。5 犬山伏。6 鶏聲。7 伯母が酒。8 地蔵舞。10 關罪人。
- 〔十三〕 1 庖丁聲。2 脱殻。3 川上座頭。5 仁王。6 懷中聲。7

- 末広がり。三本柱。張蝮。目近込骨。麻生。大黒連歌。蛭子大黒。蛭子毘沙門。連歌毘沙門。氏結。相合烏帽子。昆布柿。鷹厂金。松樫。勝栗。三人夫。餅酒。鍋八糍。早漆。煎物。二人袴。懷中聲。引歌聲。鶏聲。音曲舞。栄螺。蝮。金津地蔵。地蔵舞。名取川。祐善。塗師。宗論。餌差十王。朝比奈。八尾。鬼の槌。宝の窟取。神鳴。節分。關罪人。瓜盗人。唐角力。蟹山伏。柿山伏。祢宜山伏。犬山伏。苞山伏。腰折。業平餅。大般若。石神。西翁。若菜。法師が母。髯樽。若市。老武者。歌仙。菊水祖父。金岡。枕物狂。半銭。通門。楽阿弥。庵の梅。
- 2 『鶯流狂言五番綴本』 半紙本四十冊
各冊初丁右肩に「物傳鑑」の印が捺してある外、奥書などは全く見られない。
- 1 末広がり。栗焼。通門。鱸庖丁。蛭子毘沙門。2 三本柱。鞍馬參。鳴子。内沙汰。宝の窟取。3 麻生。土筆。楽阿弥。止動方角。福の神。4 目近込骨。舎弟。節分。子盗人。連歌毘沙門。5 張蝮。咲花。祐善。素袍落。氏結。6 昆布柿。空腕。川上座頭。文荷。大黒連歌。7 鷹厂金。轍。老武者。柿山伏。蛭子大黒。8 三人夫。盆山盗人。箕被。早漆。釣針。9 餅酒。呼声。骨皮。吃。關罪人。10 勝栗。口真似。伯養。清水。河原太郎。11 筑紫奥。二人大名。悪坊。鬼の継子。斯好舞。12 佐渡狐。痺。悪太郎。祢宜山伏。首引。13 鍋八糍。文蔵。宗論。神鳴。兒鏡流馬。14 宝の槌。居杭。餌差十王。棒縛。花折新発意。15 隠笠。伊文字。二千石。瓜盗人。水掛聲。16 萩大名。雁磔。朝比奈。三人支離。合柿。17 蚊角力。井礮。栄螺。千鳥。髯樽。18

- 文角力。船ふな。小傘。蟹山伏。人か杭か。19 鼻取角力。鶏流。章魚。犬山伏。茶腹座頭。20 今參。鬼瓦。唐角力。磁石。煎物。21 人馬。御冷し。萩代。引籠。成頼。22 禁野。横座。泣聲。胸突。鹿ぞ啼。23 二人袴。富士松。大般若。武悪。金津地蔵。24 岡太夫。八句連歌。水汲新発意。心奪。歌仙。25 八幡前。伊呂波。法師が母。惣八。契木。26 鶏聲。物真似。無布施経。牛馬。苞山伏。27 引歌聲。飛越。半銭。因幡堂。不聞座頭。28 音曲舞。菅菜煖。連歌盗人。鎧。太刀奪。29 庖丁聲。昆布売。鬼の槌。狐塚。松樫。30 船渡聲。鎌腹。八尾。腰折。仁王。31 懷中聲。鐘の音。呂連。拔殻。相合烏帽子。32 賽目舞。長光。菊水祖父。伯母ヶ酒。附子。33 雁盗人。文山達。地蔵舞。石神。米市。34 墨塗。茶壺。花盗人。仏師。業平餅。35 〔習〕 鬼争。月見座頭。鶯。庵の梅。梟山伏。36 粟田口。柑子。名取川。鏡男。唐人子宝。37 靱猿。花争。薩摩守。鈍太郎。若市。38 入間川。醉辛。花見座頭。繩なひ。西翁。39 秀句傘。腹不立。塗師。寐音曲。若菜。40 〔習〕 金岡。枕物狂。泣尼。比丘定。木六駄。
- 3 『鶯流狂言一番綴本』 半紙本百九十三冊
十番ずつを一群に分け、「一」から「廿」までであるから、もとは二百冊の揃本だったらしいが、一の6、四の4、六の5、七の9、十二の9、十三の4、十六の2の七冊を欠く。別筆を交え、奥書もないが「江沢梅園藏書印」なる三行の角印を捺した冊もある。
- 〔一〕 1 麻生。2 鱸庖丁。3 楽阿弥。4 繩なひ。5 福の神。7 柑武悪。8 半銭。9 醉辛。10 心奪。
- 〔十四〕 1 文相撲。2 人か杭か。3 小傘。4 早漆。5 瓜盗人。6 粟田口。7 鬼瓦。8 大般若。9 いぐゐ。10 賽目舞。
- 〔十五〕 1 八間川。2 因幡堂。3 神鳴。4 鍋八糍。5 茶腹座頭。6 鼻取相撲。7 盆山盗人。8 西翁。9 水懸聲。10 河原太郎。
- 〔十六〕 1 萩大名。3 栄螺。4 佐渡狐。5 兒鏡流馬。6 靱猿。7 舎弟。8 名取川。9 苞山伏。10 骨皮。
- 〔十七〕 1 墨塗。2 鬼の継子。3 唐人子宝。4 寐音曲。咲花。6 蚊相撲。7 呼声。8 老武者。9 伊文字。10 石神。
- 〔十八〕 1 今參。2 仏師。3 唐角力。4 薩摩守。5 狐塚。6 秀句傘。7 内沙汰。8 歌仙。9 腰折。10 鏡男。
- 〔十九〕 1 雁盗人。2 棒縛。3 飛越。4 悪太郎。5 若市。6 人馬。7 横座。8 月見座頭。9 泣聲。10 鬼争。
- 〔廿〕 1 禁野。2 引括。3 梟山伏。4 鹿ぞ啼。5 成頼。6 御冷。7 胸突。8 鶯。9 萩代。10 鉢叩。
- 4 『鶯流狂言習物本』 半紙本三冊
〔三番更(甲)〕 「右所作附古書有之候得共混雜相分兼候儀茂有之候故此度相改認置者也 文化元年甲子年仲夏書之 定賢」の奥書があり、初日・二日目・三日目・四日目・陰陽三番更などについての詳細な記録である。
- 〔三番更(乙)〕 右の定賢本の写しで奥書の後に「大正四年一月三郎謹写」とある。なお中に「記 貴殿より御依頼相成候千歳及三番更写本式冊写書致候事確実也依て他に写書無之ニ付玆ニ証明候也 大正十年九月 松井契斎 水野脩三様」と認めた紙

一枚が挟んである。
〔座禪〕奥書なく、歌謡には胡麻節がつけられ、型は朱書。

5 一子相伝秘 書三番變 半紙本一冊

4 の「三番變(甲)」と同じ。

6 『鷺流狂言溜物本』 美濃紙本十一冊

〔千歳〕美濃紙を紙経で綴じた稽古本。以下同装。
〔面箱〕内題には「千歳」とあり、型附を記す。

〔こんくわの(甲)〕曲名の右肩に「一子相伝 大習秘書」とあり、奥書に「鷺流家元 仁右衛門甥 鷺群翁 義道(花押・印)」と見える。

〔こんくわの(乙)〕曲名の右肩には甲と同じく書かれ、奥書なし。甲の略書である。

〔こんくわい 後〕シテのカタリが済んでからの文句を記載する。
〔座禪(甲)〕曲名の右肩に「兩番 大習 シテ一子相伝」、下に

「太郎冠者 口伝有之」、左下に「中村秋湖免之」とある。

〔座禪(乙)〕曲名の右肩に「鷺流一子相伝」、奥書に「大正五年辰年四月為矢田滋郎之写之 鷺仁右衛門 十五歳群翁書(印)」とある。

〔座禪(丙)〕曲名の右肩に「一子相伝」、左下に「大習現ノ伝 曲口伝」とある。

〔座禪(丁)〕曲名の右肩に「鷺流 大習 直流」、下に「太郎冠者」とある。

〔金剛〕曲名の右肩に「重習」、下に「形附」とある。

〔奈須ノ語〕曲名の右肩に「八嶋替間習 鷺流直伝」とある。

7 『座禪』 横本一冊

節附はあるが型附なく、奥書もない。

8 『八嶋那須与市 さるうた』 横本一冊

「八嶋」贅問の形式で那須ノ語が型をつけて記されているが、「さるうた」はない。

9 『鉢叩』 美濃紙本一冊

「鉢叩」の節附本で、奥書はない。

10 『鉢叩』 半紙本一冊

曲名の右肩に「鷺流書上之外」、下に「勳文句 大習事」、巻末に「鷺仁右衛門弟子 岡田興邦書之(印) 岡村善五郎(印) 矢田源八郎(印)」の署名がある。

11 『鬼争』 美濃紙本一冊

鷺流だけの曲の詞章を記したものの。

12 『おにあらそひ』 原稿紙一綴

浄瑠璃が入っているので、吾妻能狂言用の台本らしい。

13 『茶襖落』 原稿紙一綴

曲名の右肩に「鷺流」とあり、ペン書きである。

14 『小舞 形附全』 半紙本一冊

奥書に「明治四十五年五月 七拾一翁 鷺群翁 義道(花押・印)」と見え、左の四十七番に節と型が附けてある。

鶴亀・土車・泰山府君・三人夫・松樛・勝栗・雁ノ金・餅酒・弓矢立合・雪山・七ツ子・掛川・宇治の晒・若松・うさぎ・小山伏・番匠屋・京土産・石引・末の松山・杉の木・春雨・暁の明星・宝の窟取・十七八・先文・柴垣・福の神・山崎通ひ・鎌

倉女郎・住吉・海道下り・鵜の段・笠の段・玉の段・放下僧・道明寺・山姥・矢嶋・景清・鞍馬天狗・加茂・是界・紅葉狩・蟬丸・弱法師・猩々。

15 『小舞』 半紙本一冊

奥書はなく左の二十四番の節附本。

鶴亀・土車・泰山府君・雪山・三人夫・七ツ子・勝栗・餅酒・弓矢立合・宝の窟取・掛川・宇治の晒・小山伏・柴垣・うさぎ・石引・杉の木・京土産・十七八・暁の明星・番匠屋・會ノ節・山崎通ひ・海道下り・住吉。

16 『海道下り 住吉』 半紙本一冊

曲名の右肩に「鷺流小舞 習」とある。

17 『鷺流間の本』 横本五冊

〔脇能間 卷〕左の四十九番を収める。

高砂・考松・弓八幡・志賀・呉服・放生川・同隣・養老・玉井・氷室・加茂・白鬚・嵐山・江嶋・大社・和布刈・白楽天・竹生島・難波・西王母・寢覚・源大夫・道明寺・九世戸・絵馬・東方朔・輪蔵・右近・同語・岩船・雨月・金札・淡路・松尾・同語・逆鋒・御裳濯川・伏見・鶴祭・橋・浦島・代主・鼓滝・富士山・御裳濯語・同大蔵流・佐保山・難波田安殿好・右近至生流。

〔二番目 三番目間 式〕左の三十九番を収める。

田村・八鳥・忠度・兼平・通盛・教盛・頼政・知章・飯・実盛・朝長・巴・碓被・経政・俊成忠度・軒端梅・芭蕉・采女・井筒・江口・定家・夕顔・半部・空蟬・野々宮・檜垣・伯母捨・仏原・藤・誓願寺・六浦・陀羅尼落葉・胡蝶・朝顔・松風・同

短キ方・楊貴妃・祇王・二人祇王。

〔雜間 参〕左の四十四番を収める。

雷電・車僧・同替・大会・是界・鞍馬天狗・同天狗・葛城天狗・飛雲・土蜘蛛・鶴・鶴飼・橋弁慶・同二人・小鍛冶・同乱序・吉野夫人・紅葉狩・同武内・羅生門・同二人・現在鶴・熊坂・鐘馗・張良・藤渡・三山・同・求塚・当麻・須磨源氏・吉野天人・第六天・項羽・大瓶猩々・錦戸・同文使・同二人・夜討曾我・阿漕・野守・殺生石・天鼓・紋上。

〔雜間 四〕左の五十七番を収め、奥書に「鷺流十一世 矢田文

蕙(角印「狂言」とある。

春日龍神・同脇・同乱序・鉢木・同供・芦刈・雲林院・遊行柳・三輪・龍田・女郎花・船橋・融・海人・梅枝・錦木・葛城・龍虎・同・松虫・忠信・大蛇・豊干・小塩・浮舟・玉葛・山姥・雲雀山・同・大仏供養・盛久・草薙・同語・愛宕空也・三笑・合浦・同隣・小原御幸・住吉詣・鷺・双紙洗・砧・恋重荷・綾鼓・千引・常陸帯・弱法師・護法・満仲・鶏龍田・鳥追舟・室君・高野物狂・加茂物狂・籠祇王・関原与市・二人静。

〔安志羅以間 五〕左の五十四番を収め、奥書に「鷺流矢田文蕙(角印「狂言」とある。

鶴亀・皇帝・感陽宮・邯鄲・班女・吉野静・船弁慶・安宅・西行桜・三井寺・舍利・黒塚・藤栄・花月・百万・自然居士・東岸居士・富士太鼓・善知鳥・籠太鼓・藍染川・小督・放下僧・烏帽子折・春栄・鉄輪・唐船・正尊・葵上・蟬丸・七騎落・俊寛・巻絹・調伏曾我・小袖曾我・元服曾我・禅師曾我・土車・

竹雪・国栖・檀風・大江山・撰待・木賊・行家・鐘引・水無瀬・橋立竜神・撰待・向・満仲・切兼曾我・元服曾我・現在七面。奥書もなく、稽古本らしい。

枕本一冊

19 『班女間』

美濃紙本一冊

18 と同じ。

20 『替の詞』

美濃紙本一冊

『空腕』の替である。

21 『装束寛』

野紙一綴

『麻生』以下百八十一番の狂言の装束附。

22 『小道具雛形』

美濃紙本一冊

小道具を図解し、寸法を示したもの。

23 『五番組合見出』

横本一冊

五番の狂言の組合せ四十組を記したものの。

24 『装束附』

半紙本一冊

『今参』以下二十九番の装束附。

25 『寒食』

紙背綴一冊

新作狂言。

26 『解脱』

美濃紙本一冊

新作狂言。曲名下に「三郎作」、左に「大正七年三月」とある。

27 『くせ舞』

美濃紙本一冊

新作狂言。曲名下に「三郎作」、左に「大正七年四月」とある。

28 『曲舞』(甲)

美濃紙本一冊

扉に「新作狂言」、「中村三郎氏作」とある。

29 『曲舞』(乙)

原稿紙一綴

曲名の右肩に「新作狂言」、左に「三郎作 大正七年四月」とある。

30 『喜の字』

美濃紙本一冊

新作狂言。曲名下に「三郎作」、左に「大正七年五月」とある。

31 『装酒』

美濃紙本一冊

曲名の右肩に「新作狂言」、下に「秋湖」と朱書してある。

32 『夢買ひ』

美濃紙本一冊

曲名の右肩に「鶯流新作狂言」、左に「三郎作」とある。

33 『ぼんくわむ』

美濃紙本一冊

新作狂言。狐を狸に変えた「こんくわい」のもじり。

34 『互得会記録』

枕本二冊

一冊は表紙に「互得会」と題し、その右肩に「先祖祭」、左下に「明治四十四年四月廿四日」とある、会の収支記録。別の一冊

は「互得会例会控」と題し、右に「大正七年」、左に「二月吉日」とある、例会の収支記録。

35 『祥雲会記録』

枕本一冊

「賛助員芳名簿」と題し、その右肩に「大正八年十一月十六日」、左に「祥雲会」とある、会の収支記録。

36 『鶯家過去帳』

一枚

路阿弥から権之丞までの、戒名・俗名・年月日を記す。

37 『鶯流扇面控』

三枚

扇面のきまりをメモしたもの。

38 『鶯流由緒書』

二枚

鶯健次郎・矢田伊之助の両名につき、畔翁が認めたもの。

39 『免状』

四通

(イ)明治四十二年十一月中村秋湖宛(座禪現之出)

(ロ)同四十三年十一月中村秋湖宛(金岡)

(ハ)同四十五年吉辰中村三郎宛(三番叟・千歳)

(ニ)同年矢田次郎宛(三番叟・千歳)

すべて畔翁より発行したもの。

40 『書簡』

二通

(イ)大正二年鶯畔翁宛 三井家より。

(ロ)昭和十一年水野宛 江池菜魚より。

41 『番組』

七通

(イ)弘化五年勅進能番組中狂言の分披露

原稿紙一綴

曲名の右肩に「新作狂言」、左に「三郎作 大正七年四月」とある。

30 『喜の字』

美濃紙本一冊

新作狂言。曲名下に「三郎作」、左に「大正七年五月」とある。

31 『装酒』

美濃紙本一冊

曲名の右肩に「新作狂言」、下に「秋湖」と朱書してある。

32 『夢買ひ』

美濃紙本一冊

曲名の右肩に「鶯流新作狂言」、左に「三郎作」とある。

33 『ぼんくわむ』

美濃紙本一冊

新作狂言。狐を狸に変えた「こんくわい」のもじり。

34 『互得会記録』

枕本二冊

一冊は表紙に「互得会」と題し、その右肩に「先祖祭」、左下に「明治四十四年四月廿四日」とある、会の収支記録。別の一冊

は「互得会例会控」と題し、右に「大正七年」、左に「二月吉日」とある、例会の収支記録。

35 『祥雲会記録』

枕本一冊

「賛助員芳名簿」と題し、その右肩に「大正八年十一月十六日」、左に「祥雲会」とある、会の収支記録。

36 『鶯家過去帳』

一枚

路阿弥から権之丞までの、戒名・俗名・年月日を記す。

37 『鶯流扇面控』

三枚

扇面のきまりをメモしたもの。

38 『鶯流由緒書』

二枚

(ロ)明治六年八月十一日金剛舞台能組

(イ)同四十二年追善狂言尽し番組(二二組)

(ニ)大正三年番組

(ハ)同七年番組

42 『鶯流狂言書上』

横本一冊

奥書に「八代目 名女川辰三郎 書之 顯行(花押)」とある。

43 『鶯流狂言名寄』

数枚

袋に「浅草区馬道町六丁目七番地 鶯畔翁」とある印刷物。

44 『鶯流狂言一覽表』

数枚

右を増補した印刷物。

45 『矢田次郎絵端書』

数枚

〈以上〉